特集

特別展 往古（いにしえ）のみやぎ
―みちびかれる道 訪ねゆくまち―

宮城県図書館は、明治 14 年 (1881) に宮城書籍館（しょじゃくかん）として開館して以来 130 年余、図書や記録などの資料や情報を県民の皆様に広く供するために収集して参りました。現在では、100 万点余りを所蔵しています。

今回は、特別展「往古（いにしえ）のみやぎ―みちびかれる道 訪ねゆくまち―」と題し、当館が収集してきた資料の中から、宮城県と旅に関する資料をご紹介します。

車などなかった江戸時代、移動手段は主に徒歩でした。一歩一歩踏みしめながら進む道は、旅人たちを未知の土地へとみちびくものでした。そして時代が移り、交通手段が飛躍的に発展するのに伴い、街並みも大きく変わっていきます。昔の人が見た景色と、今の景色を想い比べながらご覧いただければ幸いです。

※この特集記事の背景には『御城下町割繪圖』の画像を利用しています。

『和國名所鑑（わこくめいしょかがみ）』
上図は当時の旅の様子を描いたものです。
菱川師宣画 刊本 3 冊江戸 山形屋
天和 2（1682）

第1部 惹かれるみち 祈りのまち ―江戸のみやぎ路―

『松嶋眺望集（まつしまちょうぼうしゅう）』
伊勢の出身で仙台に暮らした俳人大淀三千風が、松島を吟じた自他の俳諧を主として構成した松島名勝記。松尾芭蕉もこの書のために句を寄せています。
大淀三千風編 刊本 2 冊［京都］百々勘兵衛
天和 2（1682）

中世以前の旅は、修行や巡礼、任地へ赴くことを目的とした移動がほとんどでした。江戸時代に入ると幕府・諸藩により街道・宿場が整備され、宿屋や案内人など各種観光業の成立、伊勢講などの参詣講の広まりにより、庶民も安全に旅を楽しむことができるようになりました。

江戸時代、仙台城下やその近郊の多賀城・塩竈・松島には名所・旧跡・歌枕の地が多く存在し、人々を惹きつけてやみませんでした。

『名山圖譜（めいざんずふ）』
江戸期、南画の大家といわれた谷文晁が描いた全国の山岳画集。後に『日本名山図会』と改題されています。
上図は金華山を描いたものです。
谷文晁画 河村元善編 刊本 1 冊
文化 2（1805）

『和國名所鑑（わこくめいしょかがみ）』
江戸浮世絵の開祖とされる菱川師宣の挿絵本で、全国の名所旧跡案内。本県関係では松島と宮城野がとられています。上図は松島の風景を描いたものです。
菱川師宣画 刊本 3 冊 江戸 山形屋
天和 2（1682）

第2部 にぎわう道 描かれるまち ―仙台城下いまむかし―

『御城下町割繪圖（ごじょうかまちわりえず）』 写本（彩色）
味明村（黒川郡）雫石太右衛門
天保 4（1833）

慶長6(1601)年、伊達政宗により仙台城の築城が開始されました。その後、江戸幕府に提出する国絵図・城絵図や、藩政の基本としての城下地図など、様々な絵図が描かれ、仙台城下が次第に拡大する様子や、大火や飢饉などにより衰退するさまが記録されました。

また明治以降の近代化による変化や、仙台空襲後に再建する様子なども、たくさんの地図に記録されました。絵図・地図を比較してみると、仙台の歴史を垣間見ることができます。

『仙臺城下繪圖（せんだいじょうかえず）』
［仙臺藩製図］写本（彩色）
寛文 4（1664）